

これ、何？＜アゲハチョウの飼育活動＞

品川区立源氏前保育園（東京都品川区）

[4、5 歳児]

子どもの心の変化や思いに保育者が気づき寄り添った事例

子どもの姿・言葉 4歳児＝④ 5歳児＝⑤ 保育者＝T	保育者の援助・気づき
<p>レモンの木から見つけた時には黒く小さい幼虫が、レモンの葉っぱを食べながら何度も脱皮を繰り返して大きくなる姿に…</p> <p>④A「幼虫がいなくなってる！」 ④B「ちがうよ、緑のになったんだよ」 ④C「きのうまで黒かったのにもう緑になっている！」 ④A「すごい大きくなってきた」 ⑤A「この点々(幼虫を指差して)、模様っていうんだよ」</p> <p>幼虫の変化に驚いた様子で知らせに来た。</p> <p>④B「触ると怒って、つの出すよ。あとくさい臭いも…」 T「どうして？」 ④C「食べているときは、嫌なんだよ」 T「そうなんだ！よく知っているね」</p> <p>丸々太った幼虫は葉っぱを食べながら大きなうんちをする。</p> <p>④A「見て！食べてる、食べてる。あれっ！これ何？いっぱい落ちてる」 ④B「うんち、じゃない？」 ⑤A「ウエー！気持ち悪い！」 ④B「でもこれ丸いよ」 ④A「土みたい」 ④B「本当だ！土の上だとわかんないね」</p> <p>葉っぱの上のうんちを見つけ</p> <p>⑤A「あっ！ほらこれも、こっちにもあった」 ④B「だっていっぱい食べているからね」</p> <p>と、葉っぱを食べながら移動する幼虫をじっくり観察していた。</p> <p>4歳児の間では幼虫に「いっちゃん」という名前をつけ、大きい方が「いっちゃん」と親しまれていた。</p> <p>この頃幼虫は糸で体を固定し、じっと動かなくなっていた。</p> <p>④B「ねえ、いっちゃん、なんか変だよ」 ④C「(飼育箱の)壁にくっついているよ、葉っぱ食べないよ」 ④B「飽きちゃったんじゃない？」(葉っぱを食べることに・・・)</p> <p>2日後、体の正面が硬くなり、先端が尖っている様子に気づき・・・</p> <p>④A「ねえ、何これ？」④B「いっちゃんじゃないの？」 ④C「昨日は壁にいたよ・・・」 ④B「ねえ、いっちゃん、なんか尖っているよ」 ④D「ほんとだ、昨日となんか違う！」</p> <p>5歳児がその形に気づき</p> <p>⑤A「これサナギだよ・・・」</p>	<p>毎年、アオムシの飼育をする時には飼育箱にふたをしていたが、今年は、ふたをせず、花瓶にみかん等の枝をさし、なるべく自然環境に近づけるようにした。そこでいつでものぞいたり、触ることができ、アオムシに対して親近感をもてるようにした。</p>    <p>アオムシの餌は、子どもたちと一緒にわくわくらんど(園庭)のレモンやミカンの枝をとり、枯れないうちに入れ替えた。</p> <p>毎日、餌を食べながら日毎に大きくなっていくアオムシは、子どもたちの目にもその変化がとてもよく分かったようであった。</p> <p>保育者が名前をつけようと考えたのではなく、アオムシが2匹いる中で識別する為に、子どもたちがいつのまにか「名前をつけよう」という発想になった。</p>
<p>初めてアゲハチョウの羽化に居合わせた子どもたち。少しずつ羽を広げようとするチョウをじっくり観察する。</p> <p>④B「ほら 見て 動いた」少し観察してから「ここは色が違う！」羽の内側の青い部分を指さし、保育者の「きれいだね」の言葉にうなずく。</p> <p>④A「あれ 動かない」 T「ひと休みかな？」</p> <p>動きの止まったチョウを心配そうにながめる。</p>	<p>羽化したばかりのチョウは動きがゆっくりで、懸命に木につかまっている様子や羽を動かしている様子をじっくり観察していた。</p>

- ⑤A 「そうか・・・あっ動いたホントだ、死んでない、よかった！」
- ④B 「疲れちゃうからね」
- その後、チョウの動きが止まる度、他の子にも休んでいることを教える。
- ⑤A 「休んでいるんだよ」
- ④C 「出てきたばかりだから？」
- ⑤A 「そう、ずっと（羽を）動かしているし」
- 皆でチョウをじっと観る。
- ④C 「なんか・・・しわしわ」（羽が・・・）
- きれいに広がらない羽を指さし疑問に思う。
- ④C 「飛べない（飛んでいない）し」
- ⑤A 「まだ羽がやわらかいから飛べないんだよ・・・ね？」
- 確認するように保育者の顔を見る。
- ⑤C 「どうしてチョウはこんなに細い足なのに落ちないでつかまっていられるの？」
- ⑤A 「こうやって広げているから・・・だから細くても落ちないんだよ」
- 手を広げ、飼育ケースにしっかりつかまる様子を説明する。
- 羽に穴があいているのを見つけ・・・
- ⑤A 「あれ、ここ穴あいてる」
- ④A 「頭もなかなか脱げなかったしね」
- 子どもたちは、羽をゆっくり動かしたり、動きを止めて木にとまっている様子をしばらくながめながら「休んでる」「おっ動かした」とその都度声を上げる。
- ⑤A 「ほら、こっちは穴あいていない」と羽を確認する。
- 指をさしたときに人さし指が羽に触れる
- ⑤A 「あっ 指についた羽の粉（色）に気が付き親指とこすり合わせる
- ⑤A 「スベスベしてる」
- ⑤A 「前にチョウを捕まえた時も指に色が付いた」
- 違う部分も触ってみる
- ⑤A 「こっちは黒い」 その後も何度かチョウの反応を見ながら優しく触り、指についた粉をこすり合わせると光ることや羽の部分によって指につく粉の色が違うことに気付く。青い部分を触る。青く光る人さし指を見つめ・・・
- ⑤A 「青だ」とつぶやく
- T 「手に粉がつくね」
- ⑤A 「粉？うーん 色がついているから？・・・わかんない」



足の細さや羽の美しさなど図鑑や本では、実感できない。



羽化の時、頭の部分の皮がなかなか脱げなかった様子と重ね合わせて、現状を見つめていた。

保育者もそっと触る。子どもと一緒に鱗粉（りんぷん）を触り、確かめることで、保育者も興味や気付きに共感した。

<考察>偶然羽に触れたことがきっかけで、羽に粉がついていることを知った。羽の模様の箇所によっても色が違い、指でこすり合わせると光ることに気が付いていた。チョウの羽に触ることに始めは躊躇していたが、保育者も一緒に羽の表面に触れたことで、安心して羽に触り、指についた光る粉の存在に気が付くことができた。

みどころ

「黒から緑に変わった」「つのを出した」「糞を見つけた」「動かなくなった」「形が変わった」「蝶が出てきた」など、子どもたちは幼虫の変化を見つける度に「なぜ?」「どうなってる?」とよく見たり考えたりしています。幼虫に名前を付けて親しみをもって飼育しているので、細やかな変化に気付き「どうして?」と考えたり予想したりする姿につながっています。声を出して友達と話しながら確かめたり納得したりしている姿からも、「幼虫やアゲハチョウのことをよく知りたい」という意欲が把握できます。